落窪物語　堤中納言物語

日本古典文學大系

日本古典文學大系29

山家集 金槐和歌集

風巻景次郎
小島吉雄 校注

岩波書店刊行

山家集 金槐和歌集　　日本古典文学大系 29

昭和 36 年 4 月 5 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 4 月 20 日 第 17 刷 発行

定価 2100 円

校注者　風巻景次郎（かざまき けいじ ろう）
　　小島吉雄（こじま よしお）

発行者　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
　　岩波雄二郎

印刷者　東京都青梅市根ケ布 1-385
　　白井倉之助

発行所　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

山家集……風巻景次郎校注…五
解説……七
凡例……一六
上
春……二一
夏……四六
秋……五八
冬……九三
中
恋……一〇七
雑……一三五
下
雑……一八一

百首……二五〇
付録
板本六家集中の山家和歌集にありて底本になき歌……二六八
松屋本山家集にのみ所載歌……二七〇
聞書集……二七四
聞書残集……二九〇
金槐和歌集……小島吉雄校注……二九五
解説……二九七
凡例……三一四
巻之上　春部……三三一
夏部……三四一
秋部……三四八
冬部……三六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

巻之中　恋之部……三八二
巻之下　雑部……四〇四
補　注……四三一
校　異……四四五

山家集

風巻景次郎校注

解説

山家集（さんかしゅう）は、また山家和歌集とも呼ばれている。西行法師の歌の集である。山家での歌を集めた集という意味で名づけられたものであろうか。西行の歌の集を山家集と呼んだのは、いつからのことか、またその成立はいつ頃で、誰が編纂したものか、それらについての詳細はわかっていない。しかし、いわゆる異本山家集の奥書や頓阿の歌集である草庵集などに、周嗣という禅僧が西行自筆の山家集を所持していたが、法勝寺の火事の際に焼失した旨が記されているから、すくなくとも南北朝時代以前に山家集という名称があり、西行自筆と称する本があったということが、明らかである。もし、この西行自筆ということを信ずるならば、山家集は西行が生前に編み集めておいたものであるということが出来る。ただ、今日その西行自筆の本が残っていないのであるから、これを伝説として受け取るよりほかない。おそらく、西行が生前に自分の歌を書きとめておいたものもあったであろうし、またその側近者が聞くに従って写しとめておいたものもあったであろう。それらを西行私淑の誰かが整備して、今日の山家集となったものだと思われる。

山家集には、幾つかの種類がある。普通に山家集といわれるのは、六家集本山家集であって、この系統に属する本には江戸時代に開板せられた板本と、写本で伝えられたものとがある。板本は普通は二冊本であるが、下冊が下の上、下の下に区分せられているから、もと三冊の本だったのであろう。一番ひろく流布している本である。歌数一五六九首、うち重出一首、他人の歌七十六首ある。写本には、大きく分けて、近世初期に近衛家で書写せられた本の系統と、細川幽斎校合の奥書ある本の系統と、そして小山田与清旧蔵のいわゆる松屋本の系統とがある。近衛家本は本書の底本とし

たものであるが、流布板本にある歌が二十二首なく、板本にない歌が六首ある。幽斎本は、細川幽斎が校合を加えたというが、もと近衛家本と同一祖本から出ている。松屋本は今日原本なく、原本を板本山家集に校合書き入れしておいたものが残っているが、他の本にない歌が著しく多く、文明社刊「西行全集」・朝日新聞社刊「日本古典全書　山家集」でその面影をしのぶことが出来る。この本のことは、昭和九年六月及び同十年四月の雑誌「文学」に伊藤嘉夫・平井卓郎両氏の紹介文がある。

六家集本山家集とは別系統のものに、異本山家集と称せられる系類のものがある。これは前記六家集本系統より歌数すくなく、その半数以下の歌数しか収録していないが、六家集本にない歌が百数十首もある点で注目せられなければならない。異本山家集という名ははじめ尾崎雅嘉の群書一覧に見えたものであるが、明治三十九年に藤岡作太郎博士がやはり同じ名でこの系統の一書を飜刻せられたので、異本山家集という名が学界の通名になった。しかし、この系統のものは、西行法師家集という名で江戸時代に出板せられており、また西行家集・西行上人家集・西行山家集などいう名の写本としても伝えられている。

以上のほか、西行の歌を集めたものに、聞書集と聞書残集とがある。また西行自身が晩年自撰の歌を各三十六番の歌合にした御裳濯河歌合と宮河歌合とがある。ところが、夫木抄や新古今集などには、これらのどの集にも出ていない西行の歌がすくなからず載せられているから、上記以外にもなお西行の遺歌集があったかも知れないと推量せられるのである。今日残っている西行の歌の全部は文明社刊行の西行全集に収載せられており、山家集の伝本については日本古典全書本山家集の解説などに大略が述べられているが、今はそれらにもとづいて要約記述したのである。なお、異本山家集系の本から抜き書きしたものに山家心中集という書がある。

西行は俗名佐藤義清（のりきよ）、元永元年（一一一八）比較的富裕な武士の家に生まれた。はじめは徳大寺実能の随身となり、のち、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鳥羽上皇の北面の武士として兵衛尉にまでなったのであるが、何に感じたのか、保延六年十月十五日二十三歳の若さで出家した。法名円位、また西行と号した。出家後の西行は、最初五、六年の間は京洛とその附近に庵居していたが、次いで高野山に移り、真言僧としての彼の修行生活が始まったようである。その後、五十歳にして四国旅行をし、六十三歳にして熊野から伊勢へ赴き、また六十九歳の時奥州平泉に行きなどしたが、建久元年(一一九〇)二月十六日七十三歳で、河内の国弘川寺で死んだ。彼の歌を見ると、高野や熊野や伊勢のほかに吉野にも住んだようであるが、これは恐らくは入峰修行と関係があったのであろう。また西行の奥州行きは、若き日二十六歳ごろに一度と晩年文治二年六十九歳の時と二度あった。奥州旅行は同族の藤原秀衡を訪うためであった。

西行の京都における交遊範囲は、尾山篤二郎氏や川田順氏の調査によれば、比較的限定せられていて、ほぼ徳大寺家と関係ある範囲を出なかった。歌友にしてもその域を出でず、待賢門院の女房たち、大原の三寂、藤原俊成とその周辺とが主たるものであって、当時の京都宮廷歌壇に勢力のあった藤原顕輔や清輔らのいわゆる六条藤家とは交渉がすくなかったらしい。従って、顕輔の撰した詞花集には読人知らずとして一首入集したに過ぎなかったが、俊成が撰者であった千載集には、十八首入集し、俊成門下の人々によって編まれた新古今集には九十四首の多数が入集している。その歌人としての評価もその死ぬ少し前頃からようやく高まったらしく、新古今集時代にはすでに歌聖としての待遇を受け、後鳥羽上皇御口伝などにも第一級の讃辞がささげられている。

山家集の歌と金槐集の歌とには、何かしら一脈相通じるものが感ぜられる。それは、どちらも宮廷歌壇から離れていた素人歌人であったところに基因するものらしい。すなわち、どちらも連作が多いということ、俗語的発想がすくなくないということ、専門歌人的な型にはまった物の観方をしないところがあるということ、同じ言葉をくり返して用いる癖があること等いろいろと共通的なところがある。けれども、また相同じからざる点もすくなくない。金槐集は非常に

古歌に典拠を求めるところがあるが、山家集にはそれが少ないということ、俗語的発想という点では山家集の方がより甚だしくて奔放とでもいうべきほどであるが、歌の格調の点では山家集よりも金槐集の方がより高く、よりすぐれているということ等がそれである。この両者の相違はどこから生じるのであろうか。もちろん両者の境遇の相違ということもあるが、実朝には、宮廷和歌にあこがれ、京都歌壇に追随しようとする努力があった。しかし、西行にはほとんどそれがなかった。西行とても勅撰集入集を強く要望して俊成に歌を送ったり、京都歌壇の人々に百首歌を勧進したりしているが、みずから京都歌壇に追随しようとはしなかった。そこに、実朝と西行との相違が生じるもののようである。

西行の歌には、意味のよく分らない歌が非常に多い。それは、歌語でない俗語を盛んに使い、自己流な表現をするからである。あるいは、また西行の歌には全然推敲ということがないかの如く思われるものが多い。詠みっぱなしの作品らしいのが多いのである。従って、彼の歌には、よい歌も多い代りにいわゆる屑歌も多い。にもかかわらず、彼の歌がわれわれ読者の心をひきつける所以のものは、彼の歌には彼の人間がにじみ出ているからである。作品の中に人間を感じとることは、当時の宮廷和歌にはないものであった。その宮廷和歌にないものを西行の歌は持っている。そこに彼の歌の魅力があった。歌人としての西行を論じ、彼の歌について述べたものは、古来その数が多い。今さらここに屋上屋をかさねようとは思わないが、ただ彼の抒情の特殊性を日本の抒情詩の史的系列の中で、も一度あらためて見直す必要がありはしまいかと思うとだけを記しておく。西行の流れが新古今集に入り、そして、さらにその後の和歌においてどのように変形させられてゆくか、また連歌から俳諧への展開の中にそれがどのように生かされてゆくか、そういうことを考えてみると、西行的な要素は、わが国抒情詩の系列の中に案外重要な位置を占めるのではないかと思うのである。

西行は、鎌倉中期以後、伝説化されて、西行物語のような作品を生んでいる。また、西行の名を冠らせた撰集抄なる書物も出来ているが、これが果たして西行の著作であるかどうかは疑わしい。西行には歌集のほかに、西公談抄という

歌論書がある。西公談抄はまた西行上人談抄とも言われるもので、西行の弟子蓮阿が西行の歌談を筆録したものである。

なお、本書の底本にした陽明文庫本について、少しばかり解説しておきたい。この本は、近世初期書写の六家集の中のものであるが、全三冊。外装表紙の「山家集」という題字は三冊とも同一人の筆蹟であるが、本文の方は、よく似てはいるが、三冊とも筆蹟が違っている。美濃判型の袋綴本で非常に保存のよいものであるが、達筆のため、「か」「る」「り」などの仮名の書体がまぎらわしくて、その点校注者として大いに悩まされた。三冊とも所々に脱字の書き入れがあり、また見せ消ちや片仮名の傍書等が中・下冊には見えるが、いずれも本文と同筆である。この本は、先きにも述べたとおり、流布の板本にくらべて、歌数がすくなく、また誤写とおぼしき所もすくなくないので、必ずしも善本と称しがたいが、伊藤嘉夫氏の紹介により有名になったものでもあり、時には板本の誤りをこの本で正し得る点もあり、古写本のすくない山家集においては、やはり尊重すべき書物だというべきである。因みに、この六家集は、それぞれに筆者が違っているようであるが、その本文はそれぞれに特色を持っており、殊に、秋篠月清集や拾玉集等には異色があるようであるから、この六家集の本文は今後精査すれば学界を益するものがあるであろう。

次に、西行研究への入門的参考書の主要なものを列記しておく。

〔家　集〕

——木板本——

六家集本山家集　二冊（または三冊）　浄著

——活字飜刻本——

西行法師家集　四冊　新訂山家集（岩波文庫）　佐佐木信綱著　昭和三十二年　岩波書店刊

増補山家集抄　五巻〔首巻及び四季の歌の注釈〕　釈固〔松本柳斎の山家集類題（文化九年刊）に増補

追加したもの〕

纂訂西行法師全歌集　伊藤嘉夫著　昭和十年　大岡山書店刊〔本文は文明社刊西行全集のもとになったもの。附録論文にも価値がある〕

西行法師全歌集（冨山房百科文庫）　尾山篤二郎著　昭和十三年　冨山房刊〔西行全歌と西行伝記考証を収載。考証的価値に富む〕

異本山家集附西行論　藤岡作太郎著　明治三十九年　本郷書院刊〔古典的意義がある〕

校註山家集（校註国歌大系第十一巻）　野村宗朔著　昭和五年　国民図書株式会社刊〔六家集本。頭注が非常にしっかりしている〕

西行全集　佐佐木信綱・川田順・伊藤嘉夫・久曾神昇共編　昭和十六年　文明社刊〔佐佐木信綱の総説、川田順の評伝、伊藤嘉夫の歌集叢刊、久曾神昇の文献叢刊、いずれも必読のものであって、西行の著作、また西行関係文献を網羅している〕

西行歌集（新註国文学叢書）　三好英二著　昭和二十三年　講談社刊　上下二冊

山家集（日本古典全書）　伊藤嘉夫著　昭和二十二年　朝日新聞社刊〔六家集本山家集の集大成本。補遺・拾遺・存疑誤伝歌をも収める〕

——複刻本——

聞書集　昭和五年　佐佐木信綱印行（扶桑拾宝所収）

聞書残集　昭和十六年　伊藤嘉夫により文明社刊西行全集中に写真印行

山家心中集　昭和六年　貴重図書影本刊行会印行

〔注釈書〕

山家集詳解　梅沢和軒著　明治四十四年　興文館刊〔固浄の増補山家集抄の活字飜刻書。附録、固浄小伝〕

西行上人歌集新釈　尾崎久弥著　大正十一年　修文館刊

西行法師名歌評釈　尾山篤二郎著　昭和十年　非凡閣刊

西行法師（歴代歌人研究第六巻）　窪田空穂著　昭和十六年　厚生閣刊

（このほか明治年刊に千勝義重氏の山家集評釈あるよし。未見）

〔研究書〕

西行法師伝　梅沢和軒著　明治三十八年　文明堂刊・大正十一年広文堂再刊

歌人西行　高根政二郎著　昭和八年　横江稲蔭社刊

西行法師評伝　尾山篤二郎著　昭和九年　改造社刊

西行（創元選書）　川田順著　昭和十四年　創元社刊

西行研究録（創元選書）　川田順著　昭和十五年　創元社刊

（川田順氏にはさきに「俊成定家西行」（昭和十一年　人文書院刊）があり、後に「西行の伝と歌」（昭和十九年　創元社刊）の著がある。）

西行研究　窪田章一郎著　昭和十八年　八雲書林刊

西行　風巻景次郎著　昭和二十三年　建設社刊

歌人西行　伊藤嘉夫著　昭和三十一年　鷺宮書房刊

古今集　新古今集　山家集　金槐集（日本古典鑑賞講座第七巻）　伊藤嘉夫他編　昭和三十三年　角川書店刊

西行集（古典日本文学全集第二十一巻の中）　川田順他著　昭和三十五年　筑摩書房刊

西行の研究　窪田章一郎著　昭和三十六年　東京堂刊（西行研究の金字塔として必読すべきもの）

西行文献目録　大阪史談会編　昭和十五年　同会刊

このほか、講座の類、雑誌等に所載の西行関係論文や評釈は非常な数に達するが、省略する。

最後に、故風巻景次郎氏の学業をしのんで、氏が生前に発表せられた文章の一節をここに再録し、以てその西行観の一端を知るよすがとしたい。晩年の風巻氏の西行観もこれと甚だしく方向の違ったものではなかったように思われるからである。

（小島吉雄）

西行と旅

西行の旅は、いわゆる旅めいた旅は、先ず西国の旅。これは書写山、弘法大師の跡、崇徳院の御陵参拝等のためであった。次が熊野。これは当時の信仰によるものである。次が関東から奥州の旅行。この時は鎌倉で頼朝に謁し、はるかに平泉の藤原秀衡のもとまで行っている。重源の東大寺造営勧進の委託をうけたための大旅行だったらしい。外に彼は伊勢と吉野とに行っている。これは何れも一度ではない。そして伊勢では数年の間庵室を営んで暮しているし、吉野でも坐り込んでいる。そして河内の弘川寺で世を去るのである。一生旅に出ていたようであるが、そうではない。二十三で出家して、数年京師の近くに住み、それから伊勢に行き、熊野吉野に行きして、その間に西国奥州の大旅行をしたとした所で、決して後半生を満たすだけの年数にはならぬ。何うしたかといえば、法師として修行してからは、都近くの生活もまたくりかえしていたのである。

宗祇などは、同じ旅といっても、自分の学問と芸とを売って、諸国の大名の城下に招聘(しょうへい)されてゆくのである。二年三年と山口や越後や川越にとどまったのは、いわば糊口(ここう)のための漂泊であった。もち論この世に生きるたずきさえあれば、文芸の人としての宗祇はそれでよかったのであろう。しかし西行のは可成り別のようである。藤原秀郷に発する名門の一流で、悪左府頼長も富豪だと彼の台記に書き記しているように、西行は北面の武士であろうとなかろうと、生活そのものには何のかわりもない豪家の主人であったのだ。というのは、国々の庄が一生その生活をまもっていてくれる。旅はしなくても暮すに困る身分ではない。

西行の生活から考えて、彼の旅は矢張り大部分は仏教と親密なかかわりのあるものであったと思われる。しかし彼の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com